水城高等学校の震災被害状況

私立 水城高等学校　　古澤　亜紀

１．当日の学校の状況

3 月 11 日の地震発生当時，本校は 6 時限目の授業中だった。校内には，卒業した 3 年生を除く 1・2 年生，約 1100 名が教室・特別教室等それぞれの教場で授業を受けていた。教員は授業にあたっている者は教場で，その他は職員室でそれぞれ業務を行っていた。

２．地震発生時の様子

初期微動の後，やや大きな主要動が来た。さらに大きな横揺れが想像以上に長く続き，机上の本等が床へ崩れ落ち，バシッと大きな音を立てて停電が起こった。この揺れの最中はとても歩ける状態にはなかった。揺れが少し落ち着いた時，管理職から職員室にいた教員に，教室にいる生徒たちをグラウンドに直ちに避難させるよう指示が出た。本校は当時，本館・1 号館・2 号館・3 号館と校舎が分かれており，職員室も３つあった。それぞれの職員室の教員が手分けして教室を回りグラウンドへの避難指示を伝えた。この際も揺れはまだ続いており，駆け上った階段や廊下がスポンジのように感じられた。教室では授業担当教員の指示のもと，前後の出入り口を開けて脱出口を確保し，生徒は全員机の下に避難していた。生徒は落ち着いて教員の誘導に従いグラウンドに避難し整列した。整列後，恐怖から泣き出す等する生徒が数名いたが，幸い負傷者が出る事もなく避難できた。

３．地震発生後の対応（待機・避難の様子，避難場所の様子）から生徒の下校まで。

学級担任を中心に生徒をグラウンドに整列させ点呼を取り，生徒全員が避難した事を確認した。待機中，茨城県沖の大きな余震，さらに 3 度目の大きな揺れに見舞われた。グラウンドに隣接する 1 号館やネットの支柱，周囲のビルが大きく揺れるのを見て，生徒をグラウンドの東側に移動させた。

地震直後から停電や携帯電話回線の混線で情報収集が難しくなった。管理職を中心にあらゆる手段を講じて情報収集を行い，今後の対策を検討し始めた。この時，大洗にも大津波警報が出されていたが，予想される津波の高さから本校への津波の影響は無いと判断し，生徒をそのままグラウンドで待機させた。また，最寄り駅の水戸駅の様子や列車が運行できない状況である事がわかり，帰宅できない生徒が出るだろう事を認識した。

3 度目の大きな揺れの後，少し時間をおいた 16：00 頃，体育館や洗心館，校舎の被災状況がわかってきた。大きな揺れもおさまり，短時間であれば教室へ戻る事が可能であると判断した。そこで，防寒対策や帰宅可能になった時の為に，防寒具や外履きの靴，貴重品など最低限の私物を取りに教員 2 人の引率のもと生徒たちを教室へ戻し，再度グラウンドへ集合させた。

帰宅困難者を休ませる場所を確保するため，校舎の被災状況を確認した。1・2 年各担任が徒歩，自転車等で帰宅できる生徒と学校に待機する生徒を確認し，500 余名が学校に残る事になった。全生徒及び教職員に管理職から今後の対応について話があり，帰宅できる生徒は暗くなる前に帰宅させた。屋内での待機場所は，検討の結果，生徒を一元的

に管理しやすい事，すぐにグラウンドに避難できる事，目視で建物に大きな被害が見られない事から，1 号館の各教室に複数クラスをまとめて入れることにした。

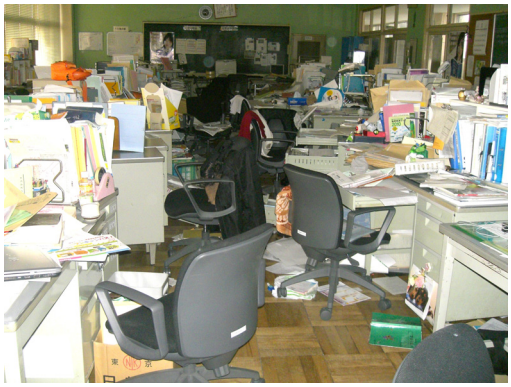
日が落ち，暗くなってきた事により教室内が真っ暗になり生徒が不安にならない様，グラウンドにマイクロバスを入れライトを校舎に当てた。寒さなどで体調不良者が出た時の対応として，マイクロバス内に暖房をかけ救護室とした。防寒具として各教室のカーテンや暗幕を外して使用した。また，飲料水は学校見学会時に配布する水が全員分あった為これを利用した。食料については 23：00 頃非常食のクラッカーの配布があった。地震発生時に受水槽が破損し水漏れが起こった為，夜遅くなると次第に校舎内の水が使えなくなった。一番困ったのは水洗トイレだったが，紙を流さない等の対応を取り，なんとか乗り切った。

夕方以降迎えの保護者が来るようになり，確認しながら生徒を引き渡し始めた。19：00 時点で 502 名が学校待機。泊りになる生徒が出ると判断しクラス別，男女別に待機場所を分けた。22：30 時点で学校待機の生徒が 358 名。人数が減るごとに教室数を縮小し，なるべく下の階に移動させていった。

教職員は 23：00 までは全員で生徒と保護者への対応を行った。その後，教員を学年コースごとに①このまま待機・②明朝 6：00 出勤・③明日 12：00 出勤，の 3 グループに分け，管理職も 2 グループに分けた。23：00 過ぎ②③の教員が帰宅した。しかし，水戸周辺に住む教員は，家族の安否を確認後，学校へ戻る者が多数いた。保護者の迎えは明け方まで絶え間なく続いた。クラス担任は生徒の待機場所，副担任や 3 年生の担任は迎えの保護者の対応と役割分担し，一晩中徹夜で対応した。6：00 の時点で生徒数が 193 名。9：00 の時点で生徒数が 82 名になった。それを機に日立方面と石岡方面，県西方面の三方向に分け，マイクロバスとキャラバンに教職員を 2 名配し，生徒を乗せて 9：46 に出発した。特に日立方面のマイクロバスは渋滞がひどく，学校へ戻ったのは 18：00 過ぎだった。

４．校舎内及び敷地内の被害の状況

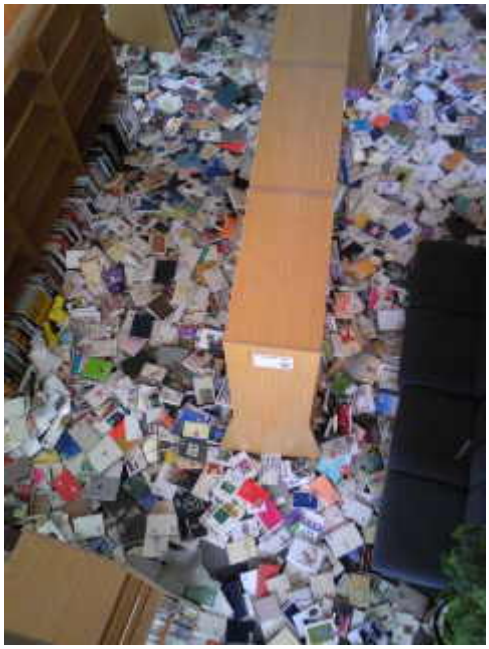
① 職員室　　写真は本館職員室の様子。
机上の書類や本が床に散乱し，教員が座っていなかった机は引き出しも出てしまった。机や椅子もスライドしていた。

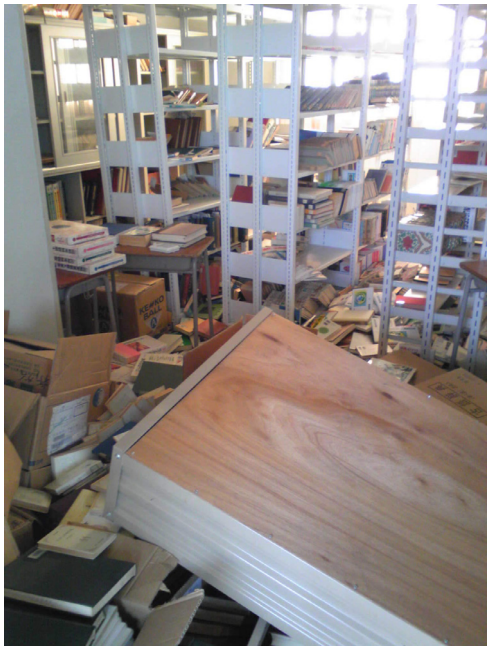


② 教室棟　　写真は本館廊下の様子。
柱にはＸ字型の亀裂が走り，トイレ前の廊下は繋ぎ目で段差ができてしまった。

③ 体育館・洗心館（武道館）
写真下は体育館の外壁・右は洗心館内部
体育館の外壁の鉄製筋交が大きく曲がった。また，天井部も破損し雨漏りする場所も。
洗心館は天井が落下した。

④ 図書室　　本は全て棚から落下した。　　棚自体も倒れたりスライドしたりした。





⑥ 校舎周辺　　3 号館前の道路。

校舎周辺では，大谷石の外壁が崩れている光景をよく目にした。

本校では本館及び洗心館の被害が特に大きかった。本館以外は補修工事や応急処置を行い現在も使用している。本館は 2011 年夏に取り壊し，2013 年度に新校舎が完成予定である。教室数が足りない分はプレハブ校舎で対応している。

５．学校周辺地域，及び近隣の被害状況

最寄駅の水戸駅は大きく破損し，常磐線等の線路は大きく波打った状態になった。校舎周辺の道路は大きく陥没したり，亀裂が走ったりして，段差が生じていた。液状化によりビルと道路の境界には大きな隙間や段差ができていた。地震発生当初は至る所で道路の亀裂から水が噴き出していた。市役所や水道局，市民会館でも天井が落下するなど大きな被害があった。停電，断水は断続的に続き，全てが正常に戻るまで長期間を要した。また，停電で信号機が機能しなかったり，那珂川を渡る橋の通行止めになったりで交通が混乱した。停電により，近隣のスーパーやコンビニはいったん営業を止めたが，地震当日の夜，手計算で店内にある商品を販売していた。しかし，その後，入荷が止ま

り営業できない店舗が増えた。生鮮食品や乾電池等の入荷が無くなり，スーパーで買い物する為に 1 時間以上，列に並ぶ生活がしばらく続いた。福島原発事故の影響で水やマスク，牛乳等の品切れが目立った。ガソリンスタンドにも行列が並び，給油量にも制限があった。買い物や給油が正常に行えるようになるには長期間を要した。

６．地震後，学校再開まで

生徒は翌週から自宅待機になった。3 月 14 日(月)に，3 年生を含め生徒全員の安否を電話にて確認した。修了式は実施せず，そのまま春季休業に入った。春の選抜高校野球大会への出場が決まっていた野球部は予定通り出場した。3 月 22 日に予定していた新入生召集日は中止した。3 月 31 日までは休校としたが，新 2・3 年生の教科書販売を 3 月 28・29 日に予定通り実施。その際担任に現況報告と，震災当日持ち帰る事が出来なかった私物を持ち帰るように指示した。

新学期は，教職員は 4 月 1 日から通常業務。生徒も 4 月 6 日に予定通り始業式を行った。また，4 月 7 日の入学式も予定通り行い，午後から新入生召集日に行う予定だった学力テストを実施した。水戸駅周辺の列車の運行状況から 4 月 10 日まで生徒休校とし，4 月 11 日から新学期のオリエンテーション，授業は通常より遅く 4 月 13 日からとした。

７．今回の地震について反省，改善すべき点等

本校では，3 年生を除く全校生徒が授業中であったが，大きな混乱も無く，全員落ち着いてグラウンドに避難できた。これに 3 年生が加わると 1500 名以上の生徒（2011 年 2 月 1 日時点で 1685 名）が一斉に避難することになる。また，年度末であったため 1 年生が学校生活に慣れていたが，これが年度初めであれば，状況が変わると考える。その時も，今回同様に落ち着いて行動できる様，通常からの指導が大切だと感じた。予備電源が使用できた点は情報収集等に活用でき良かった。公用車の燃料に余裕があった点も，灯かりや暖房の確保，帰宅困難生徒の対応に活用でき良かったので，今後も活かしていきたい。水は確保できていたが，食料や防寒具も確保するよう心掛けたい。

茨城県に住所を移してから 2 年、水城高校に勤務して 2 年。「提言」等というものは、僭越過ぎてできませんが、今回の震災で古澤が思った事を書きます。

③ 提言

水城高校に勤務が決まり，水戸へ転居した当初，地元の方から「水戸(茨城)は大きな自然災害がなく，のんびりしてるのよ。」という話を幾度か聞いた。以前に住んでいた東京都や埼玉県，千葉県は関東大震災を経験し，1995 年の阪神淡路大震災以降，大震災への対策が進んでいた。たとえば，公立の小中学校には非常食や毛布など防災用品が準備されたり，グラウンドの地下は貯水槽になっていたりした。そして，緊急避難場所の標識が当たり前のように道路に設置されていた。2012 年 4 月で，水戸に転居して 2 年になるが，街中でそのような標識や，非常食や貯水槽の場所を示した掲示物を見た記憶がない。表示はしてあるのかもしれないが，目立っていないのではないだろうか。

また，地震発生時には，緊急避難場所に指定されている学校へ行っても体育館など避難所がいっぱいで，違う避難場所を紹介された人が不慣れな地域で避難所が分からず右往左往する光景が見られた。ここから，市役所や警察など行政自体が混乱している様子がうかがえた。

今回の震災を経験して，一番に言える事は，県民全体の防災意識を高める必要がある。そして，公立私立を問わず学校や人が集まる場所を明確に緊急避難場所に指定すること。緊急避難場所に指定された学校やスポーツセンターの，体育館など避難所となる設備は，県が主導して震度 7 の地震にも耐えるよう耐震性の対策を講じる事。また，水や非常食，防寒具など防災用品をきちんと揃える事が必要だと感じた。

補足だが，津波で多くの被害者を出した大川小学校(宮城県石巻市)では，教職員や地域住民の間で避難への考え方に違いがあり，避難指示が遅れたのではないか，との意見がある。この事から，毎年各学校や地域でばらばらに行っている防災訓練を，連携して行い，緊急時の避難経路や連絡系統などを共通の認識にしておくことも大切なのではないだろうか。避難所としての学校を，より機能的なものとし，被害を最小限に抑えるためには，難しいかもしれないが，学校や役所等の緊急避難場所とそこに避難する地域が連携して防災訓練をすると良いかもしれない。